

ずいそう



地図を歩く

溝口孝遠

少し自由な時間があると、地図を片手に自分の居所の周辺を歩き回る事が度々ある。これを趣味と言うにはおこがましく、目標を持つとか、記録を残すとか、独自の考え方やスタイルを生み出すといった事は何もなくて、敢えて言えば癖のようなものだろう。

子供の頃は徒歩か自転車で、特に目的もなしにその場で思いっくままに動き回っていた。そのうち、地図の上を通過した道順を赤鉛筆でしるし、まだ通った事のない道があると、そこはどんな場所なのか確かめに行き見ないと気がすまないという具合で、地図全体が赤くなるまで続けるという多少偏執的な行動をしていた事もある。

最近では、居住している地域の文化や歴史上の事物に関連する施設、美術品、旧跡・記念碑、有名人の墓所の類などの案内書と地図を持って、今日は何と何を見つけようと目標を持って出かけるようになったのは進歩かも知れない。

地図と案内書を頼りに歩いている間に、地図を見ていながら自分がどこに居て、どの方向に向いているか判らなくなる事がある。現時点の町名、番地を確認して少し前の地点との位置関係をじっくり落ち着いて調べれば判るのだが、面倒くささが先行したりすると曲がるべき所を通り過ぎたり、曲がる方向を間違えたりして、自分の位置・方向を見失うことになる。

これには、地図は2次元の平面上に描かれているが、実際には高低のある3次元の地形と様々な人造物の谷間の中を歩いている、自分の実際の視点からは平面に描かれた地図のように全体が見通せない事と日本の地図上の町名・番地のつけ方は、平面上のブロック単位になっているのだが、道路を歩いていると得られるのは線上の1次元の情報でしかないことも影響している。

そんな事もあって、地図と案内書だけでは記念碑などの目標物がどうしても見つからない事がある。目標物の実際の形態・大きさが予想していたと言うより思い込んでいたのと食い違っ

ていた場合に見落とす事が多い。「木を見て森を見ず」と言うが、地図の助けで森を見るつもりが、平面上の地図情報ではやはり木しか見えず、袋小路に迷い込んでいるのである。

物の本によれば、人の脳は3重構造になっていて、一番内側の深い部分は五官を通じて外界の状況を把握し、自立神経系を制御して動物としての本能的な機能を司る爬虫類型脳が、中間の層には喜怒哀楽・感情を司る原始哺乳類型脳がある。一番外側は新哺乳類型脳で、言語や解析的能力を担う左脳と芸術や空間的知覚を担う右脳に分かれており、両者は脳梁でつながれているのだが、爬虫類型脳と原始哺乳類型脳とは右脳と結ばれているらしい。

少し前に、「話を聞かない男、地図が読めない女」（主婦の友社）と題する本が男女の脳の機能とホルモンの働きの違いから両者の特性の違いを論じて相互が理解し合う事を促しており、話題となった。「地図を読める」のは3次元の空間を知覚する能力によるが、男性は右脳の少なくとも4箇所空間能力をつかさどる部分が確認されているのに対し、女性では空間能力が宿る部分がはっきりとは決まっていないとの事である。男性は狩をして来たことで、爬虫類型脳の機能とともに、右脳の空間能力がDNAに組み込まれたのだろう。

そうだとすると、地図を持っていても目標物が見つけれないことのある私の場合、地図を左脳でもって解析的に眺めているばかりで、右脳の空間的能力が不十分か爬虫類型脳の働きが抑制されているためと思える。人工的でない自然の地形を前にして、自らの位置と方位を知り、進むべき方向を決めて行きたいと思えば、木を正確に分析する事を超えて、森を感覚的に捉える別の手段が必要だろう。脳の機能そのものを変えることは不可能だろうが、別の情報源から判断のレベルを高めることは出来るのではないか。地図に迷っても、地域の人の話を聞くことで、森が見えるようになるといった類のことである。

知識・情報を増やし、論理性を高める教育で左脳の能力を引き出すことに偏りがちであるが、右肩上がりの時代からの転換期の現在、右脳の持つ感性と爬虫類型脳の生命力を引き出す事が重要だろう。左脳を刺激する一方のIT時代の情報の洪水の中で、地形と環境を感じて方向を決めて行きたいものである。